



真の国際化とは自分の国を知ること。
世界でも希有な四季を持つ風土で生まれた日本の色。
古代から日本人が愛してきた色彩と季節感を今こそ見直そう。

text by 渡辺幸裕 + photographs by 稲垣純也 + illustrations by 藤田結美

世界でもまれな、はっきりとした四季を持つ国、日本。季節の移ろいは、豊かな自然をもたらす。古から日本人はその季節感を大切にし、衣食住、文化、芸術、そして行事にうまく取り入れてきた。それは色にも言えることである。

『万葉集』に「月草に衣ぞ染むる君がため斑の衣ぞらむと思ひて」巻7・1255歌という歌がある。「月草に衣ぞ染むる」とは、露草の花で衣を染めること。日本人は、四季折々に咲く様々な草花や木を使って色を生み出してきた。そしてその色にはそれぞれ和名がつけられている。このページに使われている色は、すべて和名のついた色である。

日本独特の色の文化は、平安時代に芽生えたと言われる。時代ごとに流行色があり、わび・さびを感じさせる「利休鼠」のようなくすんだ色が好まれた時代もあれば、贅沢を戒める奢侈禁止令が出されるほど、庶民が派手な色彩を求めた時代もある。

明治初期、日本を訪れた英国人化学者のアトキンソンが、「ジヤパンブルー」と称した色がある。それは蓼藍と呼ばれるタデ科の

植物で染められた藍色である。当時多くの日本人が藍色に染められた着物を着ていたからであろう。蓼藍を染料とした青い色はその濃さにより「水色」「空色」「鸞眼」「浅葱」「縹」「藍」と分けて呼ばれる。ここにも日本人の豊かで繊細な感性が垣間見える。

化学染料の開発や印刷技術、建築資材の発展に伴って、生活環境を持つ色彩は変化してきた。多くの色が街中に溢れるようになったが、変化があまりに急激であるがゆえ、多様な色を使いこなす作法を現代人はまだ十分に身につけていないように思われる。戦後我々が作ってきた街を見れば、風景の中であって、いかに色彩の調和が取れていないかが分かるだろう。

古の日本人が育んできた季節感と色彩感覚、そして情感が失われつつある今、素朴ながらも雅な和名のつけられた色を知ること、それを思い出してもらいたい。そしてこの国に息づく季節感と、そこから生まれた独自の色彩感覚を、生活に、ビジネスに生かしていきたい。

やまと 日本の ふれ

豊かな四季が生んだ日本の色

第二部・第七回



- 藤色 (ふじ)**
藤の花のような色。
- 千草色 (ちぐさ)**
薄い浅葱色。千草はツユクサの異名。
- 菜の花色 (なのはな)**
アブラナの花のような色。
- 東雲色 (しのめ)**
夜明け頃の東の空のような色。
- 桜色 (さくら)**
やや紫みの薄い紅色。
- 藤紫 (ふじむらさき)**
藤色がかかった紫。
- 若竹色 (わかたけ)**
その年に生えた若い竹のような色。
- 梔子/支子 (くちなし)**
クちなシ(アカネ科の常緑低木)の実で染めた濃い黄色。
- 一斤染 (いっこんぞめ)**
紅花一斤で絹一疋を染めた色。
- 牡丹色 (ぼたん)**
ボタン(中国から日本に渡来した落葉低木)の花のような色。
- 紫苑色 (しおん)**
シオン(キク科の多年草)の花のような色。
- 常盤色 (とぎわ)**
松、杉などの常盤木(常緑樹)の葉のような色。永久に変わらない色という美称として用いられた。
- 鬱金色 (うこん)**
ウコン(ショウガ科の多年草)で染めた黄色。ウコンの根茎は黄色染料や、健胃・止血剤として使われる。
- 黄丹 (おうに)**
クちなシと紅花で染めた色。古来、皇太子の袍の色である。
- 韓紅/唐紅 (からくれない)**
舶来の紅の色を賛美してつけられた色名。
- 菖蒲 (しょうぶ)**
ショウブの花のような色。
- 利休鼠 (りきゅうねずみ)**
利休茶に鼠色がかかった色。
- 萌黄/萌木 (もえぎ)**
草木の新芽の色。
- 柿色 (かき)**
柿の実の色。
- 薄紅 (うすくれない)**
薄い紅色。
- 江戸紫 (えどむらさき)**
江戸で染めた紫色。江戸を象徴する色の一つ。
- 利休茶 (りきゅうちゃ)**
茶人、千利休が好んだことからこの名前がつけられた。
- 抹茶色 (まっちゃ)**
抹茶のような色。
- 橙色 (だいだい)**
ダイダイ(ミカン科の常緑小高木)の果皮のような色。
- 今様色 (いまよう)**
紅花で染めた色で、平安時代に用いられた。
- 露草色 (つゆくさ)**
ツユクサ(ツユクサ科の一年草)の花で染めた色。
- 深川鼠 (ふかがわねずみ)**
緑みの明るい灰色。
- 鶯色 (うぐいす)**
ウグイスの羽のような色。
- 伽羅色 (ぎやら)**
香木の伽羅で染めた色。色の名前としての用法は新しい。
- 石竹色 (せきちく)**
石竹(ナデシコ科の多年草)の花のような色。
- 杜若色/燕子花色 (かきつばた)**
カキツバタ(アヤメ科の多年草)の花のような色。鮮やかな紫みを帯びた青。
- 瓶覗/甕覗 (かめのぞき)**
染料の藍汁をためておく藍瓶にちょっと漬けただけの色とも、藍瓶をのぞいた時の色とも言われている。
- 鶺鴒色 (ひわ)**
ヒワの羽を連想させる色。ヒワは、スズメ目アトリ科に属するカワラヒワ・マヒワ・ベニヒワの総称。
- 黄蘗色 (きはだ)**
キハダ(ミカン科の落葉高木)で染めた色。樹皮の内皮は鮮黄色で健胃薬や染料として使われる。
- 浅緋 (あさひ)**
浅く染めた緋色。また、その色の袍(ぼう)。平安時代、五位の者が着た。
- 桔梗色 (ききょう)**
キキョウの花のような色。濃い青紫。
- 新橋色 (しんばし)**
明治末から大正時代に、東京・新橋の芸者たちに好まれたことからついた色名。
- 柳色 (やなぎ)**
柳の葉のような色。昔は萌黄色の縦糸と白色の横糸で織った織物の色を指した。
- 柑子色 (こうじ)**
柑子(ミカン科の落葉小高木)の果実のような色。
- 鴛鴦色/朱鷺色 (とき)**
トキの風切り羽や尾羽のような色。1981年に日本の野生のトキは絶滅した。
- 古代紫 (こだいむらさき)**
くすんで波みのある紫。
- 浅葱色 (あさぎ)**
薄いネギの葉の色。
- 裏葉柳 (うらばやなぎ)**
柳の葉の裏側に似た色。
- 鳥の子色 (とりの子)**
鶏卵の色。
- 紅梅色 (こうばい)**
紅梅の花のような色。
- 茄子紺 (なすこん)**
ナスの実の色のような紺色。
- 納戸色 (なんど)**
江戸時代に流行した藍染めの一つ。名称の由来の一説に、納戸の垂れ幕などに用いられていたためというのがある。
- 山葵色 (わさび)**
ワサビ(アブラナ科の多年草)のような色。
- 山吹色 (やまぶき)**
ヤマブキ(バラ科の落葉低木)の花のような色。
- 撫子色 (なでしこ)**
ナデシコ(ナデシコ科の多年草)の花のような色。
- 苔色 (こけ)**
苔のようなくすんだ黄緑色。
- 蒲公英色 (たんぽぽ)**
タンポポの花のような色。
- 麴躰色 (つづじ)**
赤いツツジのような色。



Yukihiro Watanabe

ビジネス・コーディネーター。1950年生まれ。前職のサントリー宣伝部で、海外イベントを担当した時、自国文化についての知識のなさを痛感。2001年独立を機に日本文化超初心者会“和・倶楽部”を提唱、運営中。会のコンセプトは「日本人に生まれたことを喜びたい」。

写真：新聞雑誌

カラープランニングセンター Color Planning Center



お話しいただいた人

永田泰弘さん
社長

■お知らせ■

「日本かぶれ」では読者の皆様にご参加いただける様々なイベントを計画しております。伝統文化を体験するセミナーや伝統芸能を鑑賞する催しなど、日本をよりよく知るための機会としてご活用ください。詳細は当コラムと日経ビジネスアソシエオンライン(<http://nba.nikkeibp.co.jp>)を通じて順次お知らせいたします。ご期待ください。

お詫び

3月20日に掲載の「日本かぶれ」で、風呂敷包みの写真7点に関する名称の順序に誤りがありました。正しくは、右から、巻き包み、本包み、ティッシュボックスカバー、びん包み(2本)、すいか包み、ドリンクバッグ、書類バッグとなります。お詫びして訂正いたします。